

論文の要旨

学籍番号 62020006

氏 名 村仲隼一郎

題 目	回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者の Quality of Life に基づく作業療法実践の構築に向けた研究
<p>要 旨</p> <p>我が国における脳卒中に関連する広範な文献研究から、現在の回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者に対する作業療法実践の目的は、実績指数の向上を中心とした ADL の向上が焦点となり、長年にわたり作業療法が価値をおいてきている Quality of Life(QOL)に 焦点はあたっていない。本研究においては、この問題の理由を明らかにするため以下の 3 つの主要な背景を設定した。1 つめは、本邦の作業療法領域における脳卒中者の QOL 概念の課題が明らかになっていないこと、2 つめは、我が国の脳卒中者に合った QOL 概念が不明瞭であること、3 つめは回復期リハビリテーション病棟において効果指標としての QOL 評価が活用できるか明らかでないことである。これら 3 つの背景の問題に取り組むことにより、回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者の QOL に基づく作業療法実践の構築に貢献できると考えた。</p> <p>以上より、本研究の目的は以下の 3 つである。1 つめは本邦の作業療法領域における脳卒中者の QOL 概念の課題を明らかにすること、2 つめは我が国で使用可能な脳卒中者の新しい QOL 概念を抽出すること、3 つめは回復期リハビリテーション病棟における効果指標としての QOL 評価が活用できるかを検討することである。これらを統合することにより、回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者の QOL に基づく作業療法実践の実現にむけた一助となることとした。</p> <p>本研究の結果として、目的の 1 つめである、本邦の作業療法領域における脳卒中者の QOL 概念に関する課題を明らかにすることに対し、研究 2「我が国におけるクライアントの QOL に対する作業療法実践の文献研究 ―38 の事例報告―」にて、作業療法実践における QOL 概念の課題を明らかにし、研究 3「作業療法の実証研究における QOL の定義と測定に関するスコーピングレビュー」にて、作業療法の実証研究における QOL 概念の課題を明らかにした。結果、我が国における作業療法実践および作業療法研究で用いられている QOL 概念は、曖昧で一貫性に乏しく、明確に定義されていない概念として使用されているという課題が明らかになり、実践や研究の報告において明確に QOL を操作定義する必要があると考えられた。</p>	

(注) 内容は 2,000 字程度とすること

目的の2つめの我が国で使用可能な脳卒中者の新しいQOL概念を抽出すること対して、研究1の本邦における脳卒中者のQuality of Lifeに関する概念分析では、【心身機能の状態や程度】、【主体的な生活態度】、【人的・社会的な環境】【ADLや社会参加の状態や程度】、【心の安定、満足感と幸福感】の5つの概念が明らかになった。また、研究4の脳卒中者のQOLに関する作業療法士の認識：質的記述的研究では、【意味のある作業への適応】、【良好な個人的因果関係】、そして、【家族の幸せと良い人間関係】の3つが明らかになった。これらの概念を脳卒中者のQOL概念を臨床で用いることで、回復期リハビリテーション病棟において、作業療法や保健福祉学の視点を含んだ効果的なQOL支援が可能になると考えられる。

3つめの目的である回復期リハビリテーション病棟においてQOL評価が活用できるかを検討することに対し、研究5の脳卒中者に対するリハビリテーション実施時間数と回復期アウトカムおよびQuality of Lifeとの関連性の検討－回復期リハビリテーション病棟の退院時における横断研究－を位置付け、リハビリテーション実施時間数と回復期アウトカムおよびQOLの関係性を検討した。その結果、在院日数が長くりハビリテーション時間が増えることでFIM利得が高くなる傾向がある一方、実施時間数が長くなりすぎると、QOLや回復期アウトカムに負の影響があることが示された。先行研究からは、QOLに負の影響を与えるのは単に在院日数の長期化や実施時間数の増加だけではなく、ADLの回復の程度、退院環境の状態、本人・家族の意向などの複数の要因との関連が考えられた。したがって、FIM利得や実績指数を主な効果指標としながらも、QOL評価を副次的な指標とすることは、脳卒中者の意向や環境面も含めたQOLの状態を把握できる可能性がある。この側面においては、回復期リハビリテーション病棟におけるQOL評価は活用できる可能性が示唆された。

研究1から研究5を通し、我が国におけるQOL概念の課題を提示できたこと、新しいQOL概念の抽出できたこと、回復期リハビリテーション病棟でのQOL評価が活用できるかを検討できたことは、回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者のQOLに基づく作業療法実践の構築に向けた一助となると考えられる。また、今後、回復期リハビリテーション病棟において脳卒中者のQOLに基づく実践を促進するためには、作業療法や保健福祉学の視点を含んだQOL尺度の開発と、回復期リハビリテーション病棟におけるQOLをアウトカムとした作業療法実践の研究が今後の課題であると考えている。

本研究の保健福祉学への貢献は、ヒューマンサービスの目的であり、且つ、共通言語であるQOL概念を明らかにしたこと、保健福祉学領域のQOLの課題が明らかになったこと、そして回復期リハビリテーション病棟における脳卒中者へのQOL支援に向けたエビデンスを提供したことである。以上より、本研究は保健福祉学に関わるQOL研究、脳卒中者のQOLに関する教育、そして、回復期リハビリテーション病棟に入棟している脳卒中者のQOL支援に対し広く貢献するものであると考える。